

「第2回ふるさと秋田文学賞」入賞作品 あらすじ

最優秀賞 「横手盆地で農を継ぐ」

すずきとしよし
鈴木利良さん（横手市）

横手盆地——太古、ここは湖の底だったといわれています。今、暁の青田の海に立ち、群青の稜線を見回すと、祈りにも似た悠久の時の流れを実感します。この地で、農家の跡取りという宿命に反発を感じながらも、兼業という形で生活を紡いできました。

現在、“米農家壊滅”の深刻な危機に遭遇し、農家は弱者ぶってはいけません。ありったけの知恵を振り絞るのです。磨いた感性を研ぎ澄ますのです。大地を耕して食料を産する者の強さを、発揮する時なのです。

優秀賞 「みちのく鬼譚」

もりかわるみこ
森川瑠美子さん（横浜市）

主人公翔也は、秋田出身の友人の代わりに、銀座のデパートの物産展でなまはげを演じるアルバイトをする。アルバイト後、打ち上げに誘われるが、会場に忘れ物をし、なまはげの衣装を着たまま残っている男を見つける。共に打ち上げ会場に向かう途中、道に迷い、一緒に男鹿市へ行くことになる。五歳のときに別れた翔也の父親は秋田出身で、父親への思慕から男鹿への同行を承諾したのである。新幹線の中で、いじめをする高校生たちを懲らしめたことから、翔也は男が本物のなまはげだと知る。男鹿市で父親がなまはげから子どもを守る姿を目にし、翔也は父が自分にかけてくれた愛情を感じていた。翔也を秋田に誘ったなまはげは、山へと帰っていく。

優秀賞 「いつか、夏が終わる前に」

わたべあさみ
渡部麻実さん（横浜市）

中村莉子は両親にすすめられるがまま進学し、東京で中学校教諭となったが、敷かれたレールの上を歩くような人生に違和感を感じ、実家の秋田には寄りつかなくなっていた。孤独な教師生活に光がさした同僚との恋愛は、結果として不倫からの妊娠、そして学校を辞めることになった。莉子は、行きどころをなくし秋田に戻るが、世間体を気にする両親から冷たくあしらわれ、心を通わせることはなかった。子を持ち親となってもお互いを理解できない母と娘。竿燈の季節を前に莉子は自分の人生を生き直すため、再度秋田を離れる決意をする。